

幕末を駆け抜けた
ある“情報屋”の物語

号外屋 赤兵衛

飯島博

PHP研究所

〈著者略歴〉

飯島 博(いじま ひろし)

1949年、大分県に生まれる。法政大学法学部中退の後、フリーのライター、エディターとして活躍。心の時代の月刊誌「一心 TASUKE」編集長等を経て、現在、出版、PR及び映画プロデューサー。著書に『アイ・アム・ヒア』（CBSソニー出版）がある。

号外屋赤兵衛

幕末を駆け抜けたある“情報屋”の物語

1990年11月2日 第1版第1刷発行

著者	飯島博
発行者	江口克彦
発行所	P H P 研究所
東京本部	03-239-6221
〒102	千代田区三番町3番地10
京都本部	075-681-4431
〒601	京都市南区西九条北ノ内町11
組版	株式会社ギャルド
印刷所	株式会社精興社
製本所	株式会社大進堂

©Hiroshi Iijima 1990 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。

ISBN4-569-52905-4

号外屋 赤兵衛

――幕末を駆け抜けたある“情報屋”の物語――

目次

プロローグ——函館の赤い墓
7

国抜け
25

奔走
43

乱世
80

訣別
105

炎上 129

再生 172

エピソード——赤い葬列 195

あとがきにかえて

号外屋赤兵衛

——幕末を駆け抜けたある“情報屋”の物語

ブローグー 函館の赤い墓

深夜の雷をともなった豪雨は去り、山背泊^{やませどまり}にはつとした朝がきた。函館の最西端にある最古の街は、ゆっくりと目覚める。

函館の開拓は海岸線に沿って開けたが、山背泊は福山を対岸にしていた関係から、函館の玄関として栄えてきた。だから住民は先祖代々から幾代にもわたって生活をしており、互いに強い結束を持ち合っている。隣保相扶の街なのだ。

私は初めて函館へきた。目的は本を書くための取材だ。一九二四年チェコスロバキアで生まれたカール・レイモンが三十歳のとき函館へやってきた。肉を食べる習慣がなかった日本人相手に、ハムやソーセージを製造し販売するためだ。異国でしかも食習慣のちがう人々を相手にどのような苦勞と努力をしたのか。彼の一生を取材することで、現代問われている国

際社会における生き方のヒントがつかめるかもしれないという企画に基づいた旅だ。カール・レイモンの墓がここ山背泊にある。

荒れた海がうそのようになっている。山背泊から眼下に港を眺める。昔から爺やが、くる日もくる日も潮見をした場所だ。風が変われば必ず沖の潮を見る。かつて潮見にきた爺やが驚くものを見て腰を抜かしたことがあった。

安政元年（一八五四年）四月十四日、五艘のアメリカ軍艦が函館にきた。一日待機をし翌日、五艘とも港内に入った。

「家老と奉行は大工を召連れ弁天の社に在り坪錐にて壁に穴を穿ち穴より異船の大造なると大砲の厳しきを覗き見て顔色土の如く変じ戦い慄きそこそにして本営に帰る」

と、肝の冷え具合を『松前紀行』に素直に書いている。驚きはさらに続く、

「異人等七八人沖の口より上陸したるに付随ふ足輕共は鬼の導引する思いか顔色勿論青菜の如く非常を防ぐはさて措き異人等の言ふが儘に城戸を開き市中は元より山上寺社の差別なく思う儘に往来いたさせ之れが為め市人は益々恐怖し固く門戸を鎖して一と縮となり声をも出さざり」

息を潜めてのぞき見ている様子が目に浮ぶ。このように山背泊の街を大騒動に巻き込んだペルリ艦隊は、同年五月八日函館を退帆した。ペルリの乗る旗艦ポーハタン号の姿が、手を

かざしても見えなくなったとき、潮見の場所に集まってきた街中の老若男女は、ほっとしたため息とともに、可能なかぎり背伸びをしていた踵を地に着けた。

その潮見の場所は現在墓所になっている。ペルリ艦隊の水兵二名が在函中死亡し、ここに葬られている。以後、街の人々はもちろんロシア、中国など函館と縁の深い外国人の墓が立ち並んでいる。

数知れずある墓の正面は、みな海を見ている。生者はここで潮を見、死んでは生まれ故郷を海に向うに見ているのだらう。赤と白の灯台をすり抜けて大きな貨物船が港を出て行く。ちょうど洞爺丸が沈んだ海の上を静かに、ゆっくりと走って行く。

墓と視線を共有するような、墓と同じ高さまで腰を落して海を眺めると、風に逆らって声にならないうめきのようなものが聴こえてくる。民族を問わずここで幾代にも渡って生活してきた人々の表向きとは違って、心の中の深い哀しみが墓という居場所を得て初めて噴出するいいようなない怒りが、鋭いナイフとなって空気を切る。

異様な墓がある。

高さ約三メートルもある自然石を真つ赤なペンキで塗った赤い墓だ。哀しみの場にそぐわない赤い墓だ。

滑稽と驚きと興味が、どっと胸を突き上げてくる。近づくと、赤い墓には「天下の号外屋

翁之墓」と刻まれ、白ペンキが埋められている。函館にあつて、天下とは一体どのような意味か。また号外屋というのは何か。死んでまで自分を強烈に主張する人間とはどのような人生を生きた人だろうか。一種不思議な思いが湧いてくる。

立ちつくしたまま、しばらく赤い墓を見つめていた。それから近づいて手で触ったり、四、五歩後ずさりして全体を見たりして、赤い墓に眠る人間の魂の波動が伝わってこないかと待つてはみたが、響くものは何もなかった。

赤い墓の右横に市の観光課が設置した由来書きがある。マリンプルーに白抜きで文字で次のように書いてある。

「赤色の信仰家信濃助治は、明治二十七年（一八九四年）六月家具をはじめ衣類・コート・帽子・足袋のはてまで赤づくめにして来函した。同年十一月、日清戦争の頃北海新聞の号外を函館市民にまいて天下の号外屋と称して売り出した。『赤い心』は日本武士道の精髓を表わすとして、すべて赤色を用いたとのことである。日清戦争終結後は、戦勝記念に名將軍を全国にたずねて書を頼むなど、奇行の多い人だった」

待たせてあつたタクシーの運転手が煙草を吸いながら好奇の目で見つめていた。手招きをしてよび寄せた。

「天下の号外屋ってどのような人物ですか。この由来書きでは、変な人だと思うだけで、



来函の目的など肝心なことがちつともわからない。まあそれはよしとしても、どうして墓を赤い墓にしたのか、そのことが説明されていないですね」

と、尋ねた。眼鏡をかけた三十歳ぐらいのタクシーの運転手は、かぶっていた会社の制帽をあみだにかぶりなおしながら、

「赤い墓があるのは知っていたが、由来となると知らないね。観光タクシー用に、名所の由来についての説明書が配布されているのだが、実はそのパンフレットにのっていないんだ。ほらあの小さな小屋があるでしょう。墓守りの小屋だから、そこで聞いてみたら何かわかるかもな」

答えというより、困った質問をする客だという態度だった。とはいいながら先に立ち墓守り小屋へ歩いた。ここだ、と指差すしぐさに、うなずき、

「お早ようございます」

何度かガラス戸をたたきながら呼びかけても、中からは返事がない。

「朝早いからいないのかな。昔は住んでいたけれど、近頃は通いになったからな。昼頃ならいるかも知れんが。それなら地蔵寺へ行ってみたらいいんじゃないかい」

タクシーに乗って一分。地蔵寺を訪ねた。門を入ると犬が吠えた。玉砂利の音を気にしながら庫裏へ声を掛けた。朝餉の後片付けをしていたのだろう、白いエプロンでぬれた手をふ

きながら、内儀さんが奥から顔を出した。

「赤い墓のことですか、知りませんね。ちよくちよく聞かれるんですが、お寺の墓地ではないので、過去帳もないし、現在どなたがお守りしているかはまったくわからないんですよ。市の観光課に尋ねてもらうのが一番いいと思いますよ」

タクシーの後部座席に、深々と腰をおとした。運転手は申しわけないと、しきりに詫びている。詫びられることは何もない。かえって興味を勝手に持ったこちらこそ、すまないと詫びたい気持だ。

せめてもう一度赤い墓を見て帰ろうと振り返ったとき、突然胸の奥を突き上げるように声がした。

「赤い墓はかげぼうし、正体見ずにはおくものか……」

*

JR 函館駅近くのホテルへ戻った。部屋に入ると市の観光課のダイヤルをゼロ発信の後、回した。

「私共には資料がないんです。由来は郷土史家の先生がお書きになったもので、くわしくは先生の方で尋ねてください。電話番号を今、お教えしますから」

教えられた電話番号を回す。郷土史家は市内にある古い浄土宗の寺の住職だった。

「由来ですか、あの由来書き以上にはわからない。なにせ資料がなくて。函館で赤い墓のことを知っている人はだれもいないんじゃないかな。え、遺族？　だめだめ、なにせなんにもわからないんだって」

返事の中に、函館にも、歴史にとっても、それほど重要な人物でもないものを、という軽いうとんじが感じられた。それでいて観光客向けに由来書きを書くとは、どのような神経だろうか。いま一度、市の観光課へ電話をし、赤い墓の管轄寺について問うてみたが、答えはそっけなかった。

「先生がそうおっしゃるなら、それ以上はもう見当がつきません」

受話器を持ちかえ、ノートをひろげた。赤い墓に刻まれた文字をメモしてきた。

「大正元年八月建之／先祖信濃忠左衛門／七代目信濃助治／昭和四年六月五日午前五時没／妻信濃シゲ／明治三十六年五月廿三日没」

お役所仕事に腹が立つ。何もわからない観光課が、なぜ由来書きを堂々と立てているのか。内容が真実かどうかもわからず、また調査をしようもしない。

怒りが込み上げてきた。だが、なぜ通りすがりに偶然見た赤い墓にこれほどこだわるのか不思議だった。一体あの赤い墓は何なのだと、口に出していつてみた。すると再び全身を貫くような“あの声”が走りきた。